

# 素人蛾屋のたわごと

下野谷 豊一

虫を集め研究している人の中にも、カミキリムシや、オサムシなどの甲虫や、蝶だけを、という様にある一つのグループのみを集め、研究している人も少なくない。その人達を、それぞれ、カミキリや、オサや、とか、チヨウや、とか、虫屋の仲間では呼んでいるが、蛾を集めている人を呼ぶとするなら、さしづめ、があや、とてもいうことになろう。（どうもごろが悪いが……）「蛾を集めています」というと、よく「蛾と蝶はどう違うのですか？」と聞かれることがある。そこで、無理をして学のあるところを見せようと、「蝶と蛾は、分類学的には同じ鱗翅類（目）で便宜上区別しているだけです」と答えると、相手は、何か判った様な、判らない様な、ふりをする。

又、「蛾は翅をバタバタさせて飛ぶと粉（鱗粉のこと）がたつて大嫌いだ」、「よく氣味悪くないですね」とか、「体に毒ありませんか？」

などいろいろいう。まして「蛾の幼虫は、みな、毛虫でこれも又、面白いのですよ」などとでも話そうなら、何と変った人だろうと一種躊躇む様な態度で、「仲々よい趣味ですね」と、お世辞じみたことをいう。

そこで、お人好しの我々は、「よく、ドクが、が大発生し、その付近の人々が被害にあったなどと、新聞に書かれていますが、蛾の鱗粉に毒のあるものなど、ありませんよ」とさらに、「イギリスなどへ行くと、蛾の採集などの昆虫採集や研究は高級な紳士の趣味ですよ！」などと、一席、ぶつはめになる。

事実、ドクがには一般に思われている様な「毒」は全くなく、ただ、蛾（成虫）の幼虫時代に体についている「刺毛」という特殊な毛が蛹から羽化するとき、蛾の体についてくるので、その毛が、飛び散り、人の体などにささったりして、炎症を起すにすぎないのである。

蛾は、一般に夜、活動するものと思われているが、アゲハモドキなどの様に屋間、飛びものも少なくない。しかし、夜間活動するものがその大半で、従って蛾の採集法で、一番有効なのは、誘蛾灯などの灯火を使用して集める、夜間採集ということになる。夜間採集といっても、よく世の紳士諸士が、夜の盛り場で、『夜の蝶』を採集するのとは違いますぞ！！

さて、夜間採集ということになるが、我々が、夜間採集に行くと、よくその行った先の人より「〇〇頃だと、電灯に沢山の蛾が集って来ますよ」と聞くことがあるが、大ていの場合、それら

---

は、大型のクスサンや、オナガミヅアオ、などで、目的としているものではなく、その様な情報は、役立たないことが多い。

先ず、夜間特集をするには、いくつかの用具が必要であり、その一つに、蛾を集めるための誘蛾灯である。電源のない山間部の場合、以前はアセチレン・ランプを使用して来たが、最近がやにどって、革命的ともいえる。携帯用発電灯なるものが出現するに至り、夜間採集の収穫は大幅に増加した。我々も早速この新兵器なるものを使用し、県内各地で採集を行ない、その成果は、以前に比べ、画期的な進展があった。

又、蝶にしても蛾にしても、採集には、やはり、上場所を選ぶことが大切で、蛾の夜間採集の場合、それを一口でいいうならば、林などを見下すことの出来る、展望のよくきくところ、といえるが、これにもいろいろな条件が、からんで、例外も多く出て来る。

例えば、河野村、大良でのこと。

上記の条件にあてはまる場所を選んで、期待に胸ふくらませて、誘蛾灯をつけたが、さっぱり集まらず、あとで地元の人聞くと、その場所は、丁度風の通り道で、夜になると海より吹き上げてくる風に蛾が吹き流されてしまい、灯火まで飛んでこれないことが判った。風も充分考慮しなければならないことである。

失敗談でなく、悪条件のもとで予想外の成果のあったことを御披露するなら、昨年(1968年)8月に大野市小池へ行ったときのこと、夕方に福井市を出発する頃からすでに台風の前ぶれて、風が少しあり、又、今にも降り出しそうな雲行で、大野市内へ入った頃には、雨が降り出し、さらに、目的地の打波川上流の小池へ着いたときには、はげしい雷雨となり、落雷が恐ろしくて白布を張るための鉄柱も立てられず、正直いって生きた心地がしなかった。しかし、運よく雨が少し弱まり、又、折角ここまできたのだからということで、一寸としたくぼ地にある。土場の索道用ウインチの置いてある小屋(といっても、4本の丸太に、トタンをのせてあるだけのもの)の中へ、白布を張り、早速、新兵器なる、携帯用発電機を動かし、誘蛾灯をつけた。すると、どうして、予想もこない各種の美しい舞姫たちが、目をキラキラ輝かせながら、次々と集って来ではないか。中には、今迄見たこともない様な顔ぶれも混っており、雷のこわさも忘れ、集ってくる夜の舞姫たちに次々と、毒管の中へお入り頂いた。このときの採集品中には、福井県より今迄に記録のない、いくつかの種も含まれていて、嬉しかった。この様に、雨の中を蛾が集って来た理由は、一つに気温が夜になっても高かった(雲天であるため)のと、それに加えて、風が弱かったことが、幸いしたものと考える。

気温であるが、これも採集の際には重要な条件で、特に山間部の場合、夜(特に快晴の日)異

---

常に温度の下ることがあり、この様なときは、蛾は全く活動せず、一晩中、白布とにらめっこで散々な目にあうことがある。

さて、以上に掲げた様な諸条件がそろえば蛾が、誘蛾灯にワンサと集るかというと、どうして、そう簡単には行かず、よく晴れ渡って、空には星がキラキラと降り注ぐ様な夜で、さらに、その上、盆のような満月でも出でていようなら、夜間採集は開店休業ということに相成る。もし、その場所が、谷川などに近いときは、舞姫ならぬ、少々グロテスクな、カワグラなどが白布を黒くする程集って来て、明け方まで、この招かざる客人とつき合うはめになる。

夜間採集には、月齢も、もう一つ、つけ加えなければならぬ 大切な条件で、まっ暗な新月の頃が最高のときである。

こうして、灯火に集ってくるのは、蛾や、カワグラ、ばかりでなく、各種の甲虫類や、その他いろいろの昆虫類も集り、時には、へそ曲りのモンシロチョウ、キマダラヒカゲ、などの蝶や、セミ類も顔を見せることをつけ加えておこう。

それから、蛾やが、「よいお天気ですね」という。採集のための諸条件をまとめてみると、新月の頃で、気温も高く、風も弱く、さらに今にもふり出しそうな雲天で、これに、霧でもかかりれば、蛾やが、隨喜の涙をこぼして喜ぶ条件となる次第

終りに、以前のことであるが、携帶用発電機のなかった頃、アセチレンランプを使用して、越前雄島へ、採集に行ったときのことであるが、8月中旬で気温も高く、風も思ったよりなく、絶好の条件と思ってランプに灯をつけたのであるが、待てども一向に蛾は集ってこず、来るのはうす氣味悪い、用のないフナムシや、ムカデの類で、夜半をすぎても全々集まる気配はなく、仕方なく、ランプを持って歩いてみると、今度は夜釣りをしている人から、明りを海に向けると魚が岸へ寄ってこないから他へ行ってくれと、しかられる仕事で、完敗に終った。

しかし、よく調べてみると蛾が全々いないわけではなく、林の中を棒でたたいて廻ると、あちこちから、蛾が飛び出して来、僅かながら採集出来た。どうして蛾が灯火に飛来しなかったのか。今もって解明出来ない。